

高校演劇の教育に占める位置

松 尾 忠 雄

1

クラブ活動のひとつである学校演劇（小学校、中学校の劇を、学校劇と呼び、高校の演劇を学校演劇と言ひ、大学の演劇を学生演劇と名づける一般的な呼称に、以下従ふことにする。）が、教育の中に、どんな位置を占め、どんな役割を果たさねばならないか、について考へてみる。

というのは、現在、学校演劇は、その教育における位置を、正當に評価もされず、正しく認識もされず、また、正しいあり方で運営されているとも言いかねるからである。

2

クラブ活動について、学習指導要領では、

の、
クラブは、学年の所屬を離れて同好の生徒をもつて組織するも

と、クラブの性格を規定し、

- (1) 健全な趣味や豊かな教養を養ひ、個性の伸長を図る。
- (2) 心身の健康を助長し、余暇を活用する態度を養う。
- (3) 自主性を育てるとともに、集団生活において協力していく態度を養う。

と、クラブ活動の目標を述べている。

学校演劇は、前記の目標を充分に満足させることは言ひまでもなく、さらに、全校生を完全に演劇創造活動に参加させる点において、人間存在の根本において教育するものである点において、大きくはみ出るものである。

3

現状はどうか。これは一概には言えない。強力な組織で活発に活動している地区、その中で意欲的な学校もあれば、演劇クラブのない学校、学校演劇にあまり関心を持たない地区もある。実にさまざまである。

しかし、最も進んでいる地区、学校においてすら、

学校演劇は、日本のアマチュア演劇のなかで最も整った組織をもち、活発な活動を行なっているわけであるが、近年その運動も一種の低迷状態にあるといわれ、将来のより大きな発展があやぶまれている。

△遠藤慎吾 演劇百科大事典 巻二 平凡社 がっこおえんげきの項V

という現状であり、また、西沢揚太郎氏が雑誌「悲劇喜劇」八昭和36年3月号Vの座談会「高校演劇の評価と基準」の中で指摘しているように「作品、舞台作りのいずれに於ても足ぶみをしている、或いは頭打ち」の状態なのである。

もちろん、一部では真剣にこれに対し反省がなされ、原因の究明が行なわれている。

演劇を人間形成の場として、広い意味の教育に利用しようとする考え方が、なかなか浸透せずいまだに低級な娯楽であるという風な考え方が残っているからであろう。……中略……教材のなかにも演劇的要素が多分にとりいれられたのであるが、これは一向に活用されず、演劇と教育との結びつきは、遅々として進まない。現在の学校演劇も、教育当局や学校的首脳者たちから、娯楽本位のクラブ活動としてしか認められていない場合が多い。

△遠藤慎吾 前引書に同じV

というのが、その間の事情の一般的な説明になるであろう。「芸能は河原者のやること」という昔からの伝統が、いまだどこか意識の底に残っているのである。この考え方は地方へ行く程強く、大きい障害になっている。

さらに、思想政治問題の介入を恐れる人もある。大正時代にはじまったプロレタリア演劇は、その系譜の中に、芸術としては、つまり演劇としては、非常に素朴であって、ただ、思想を宣伝する手段に演劇を使つたにすぎないものも多くあった。

この場合、演劇という形式は強力な武器にもなる。風評によってしか知らないが、学校演劇に思想問題が介入したこともあったらしい。しかし、学校演劇が、思想宣伝の場であつたり、政治問題に介入する場であつてはならない。

学校演劇の頭打ちないしは低調の原因として、具体的にあげられる問題に、大学進学の厳しさのために、すべてのクラブ活動が低調になる傾向にあること、俳優も観客も、たえず交代して、つねに出発点に立っていること、上演に適したよい戯曲がないことなどがあげられる。

その他、種々の原因をあげることができようし、それに応じて対策をたてることもできようが、いまいけば重要なことは、演劇の本質に立ち帰ることである。

4

「演劇を人間形成の場として、広い意味の教育に利用しようとする考え方」（前出）は演劇の本質そのものから考えて、はっきりと

理論づけをしておかないと、いろいろな誤解を生むのではないか。

5

演劇は総合芸術であるという見解がある。文学、美術、音楽、舞踊、建築などの諸芸術を総合したものであるというのである。

この見解は厳密には、まちがいを言わねばならない。たしかに演劇はいろいろな芸術を利用して成り立っている。こんな状態を総合芸術と言えなくはない。ただし、総合芸術という語の意味を広く解してのことである。総合芸術と言うと、種々の本質が、同じ比重で寄り合った芸術ともとれる。

身振の芸術である演劇が、他の諸芸術の力を、他の諸芸術におけるよりも、多く利用するために、何か、他の諸芸術の総合芸術であるかのように考えられたり、極端には演劇内における、他の諸芸術面が必要以上に重要視されるのも、演劇という芸術の、複雑な構成に、原因する。近代劇において、必要以上に、戯曲の文学性が、強調されたり、歌舞伎劇において、必要以上に、絵画的要素、舞台装置や衣裳の色彩が、要求されたりするのも、すべて、演劇の本質を、ある点で見誤っている結果である。

△加藤衛 演劇の本質▽

という加藤氏の見解は正しい。

演劇は、俳優、戯曲、観客だけで、ちゃんと成り立つのである。学校劇論、学校演劇論を説く人が、その教育的価値を論じる場合、演劇総合芸術論の考え方に陥りやすい。彼等は、児童、生徒たちに演劇を上演させることによって、つまり、舞台美術、舞台照

明、衣裳、音楽を制作させることによって、生徒の創造力を伸ばすことができ、舞台に立たせることによって、言葉に対する鋭い感覚を養うことができ、さらにこれらの作業を、生徒たちが協力してやることに、大きい教育的意義があると主張するのである。

そのとおりで、これらの教育的効果は否定できない。特に学校劇においては、前記のいくつかの教育的効果が、積極的な意義を持ち、その意義のためにのみ、学校劇は存在すると言ってよいであらう。

しかし、この考え方は、ともすれば演劇の本質を見失わせ、あるべき姿を誤らせやすい。学校演劇では、そしてなおさら学生演劇では、前記のような教育的効果でのみ演劇上演活動が存在するのではない。

6

演劇を観客の側から考えてみる。

人間は、自己の存在、「生」に、意識する、しないにかかわらず不安を感じている。そこで「生」を確認せずにはおれない。たとえば、青江舜二郎氏は、

いないいないといつて、母親が顔をかくす。幼児は泣きそうな顔をする。バアといつて母親が顔を見せる。幼児はキヤキヤ笑ってよろこぶ。なんべんもあきずに繰り返させる。その度によろこんで笑う。母親がなかなか顔を出不きないことがある。泣きそうになつてのぞきにくる。これにやがてなれると、「いないいない」のときでも、「バア」のときと同じく、笑顔をしているよう

になる。恐怖が期待に変わっていくのだ。

△青江舜二郎 演劇の本質と人間形成V

と、幼児に例をとって述べている。そして、さらに、幼児はこうして、

恐怖を、積極的な期待におきかえて——よろこびの中に、不安を解消させようというのだ。

△前引書に同じV

と言う。

葬儀は死者の霊を慰めるものである。だが、参加者の本質はどうか。彼等は仮面をかぶって「死」を行為し演技する。そして、自己の「生」を確認し、讀める。お酒を飲んで大騒ぎをする田舎の人は純粋である。人間はそうせずにはおれないものなのだ。

シェイクスピアの「マクベス」では、第一幕、第三場、荒地に登場したマクベスが

マクベス　こないやな、めでたい日もない。△シェイクスピア全集、福田恒存訳河出書房版V

と言う。これがマクベスの最初のセリフである。このとき、マクベスは、自己の死を予感しての苦悩に満ちた表情をしているとしか思えない。

福田恒存氏が、オセロー將軍と比較しながら言うとおり、

凱旋將軍マクベスにとって、王位篡奪をそのかす魔女の預言は、情熱的なオセローの嫉妬心を煽る奸臣の讒言よりは、はるかに信じにくいものである。マクベスは自由でありえた。

△福田恒存 人間・この劇的なものV

にもかかわらず、自ら選んだが如く、死への驍進を開始する。

ここで、観客も、マクベスと共に死への驍進を開始する。マクベスがダンカン王を殺したあと、

マクベス　一時間まへに死んでゐたら、幸福な一生がすごせたらうに。いまを境に、この世に本物はなくなつたのだ。なにもかも玩具同然。榮譽も徳も死に絶えた。命の酒が飲み干され、この穴倉に残されたのは、たゞ滓だけか。

△シェイクスピア全集、同前V

と言うとき、観客もマクベスとともに苦悩に満ちている。幕間に、ほつと一息ついて、できることなら、陽気な門番にでもなりたく思う。いや、たとえ、夫人がマクベスに殺されようとマクダフになつた方がましだと思ふ。しかし、マクベスは観客をとらえて離さない。バーナ、の森が動いたとき、マクベスとともに、自己の死が目の前に姿を現わしたのを見る。マクダフに

マクダフ　ふん、そんなまじなひの効きめ、いつまで続くものか、もうだめだぞ。ささまが大事に奉つてゐる悪魔の手さきに、もう一度うかがいをたててみる、このマクダフは生れるさきに、月たらずで、母の胎内からひきずりだされた男だぞ。

△シェイクスピア全集、同前V

と言われたとき、マクベスとともに、「その一言で勇氣もくじけたノ」と言つてしまふ。観客はマクベスとともに死ぬのである。

「死」を演技するのである。そして、エビローグとともに、自己の生命を復活させる。

つまり、観客は、マクベスとともに「死」を演技してきたのである。自己の生命を再び蘇えらせたのである。結局、観客は自己の

「生」を確認したことになる。

自然界の生命にはリズムがある。植物は、冬、死んで、春、生命を蘇えらせる。生命を解放する。人間の生命にもリズムがなければならぬ。生命を復活させ、生命を開放させる。生命の開放は、飛躍であるが、飛躍の前にはつくばねばならない。つくばい、飛躍する。それが生命のリズムである。人間はそれを演技する。祭がそれであった。地方ではその面影を止めているように、祭は「生」の開放である。

人間は生きるために、「死」を演技し、「生」の開放を演技する。これは、人間存在の深奥において行なわれるのである。これが行なわれないと、人間の体内は腐敗し、生命は枯死する。

アリストテレスは「詩学」の中で、

悲劇とは、徹底的で、完結した、ある大きさをもつ……叙述によるのではなく、行動という形による、哀憐と恐怖とを通じてこれらの情緒の適当なカタルシスをひきおこす、行動の模倣である。

△演劇百科大事典 卷二 平凡社 カタルシスの項から引用V
と述べている。演劇の本質を規定して、後世の演劇論を支配した、悲劇カタルシス論である。福田恒存氏が、このカタルシス論を要領よく説明しているので、やや長いが引用しておく。

ギリシヤ悲劇は……英雄の苦悶と死とがつねにそのよみがえりのために演戯されたといふことであります。それはわれわれの肉体の新陳代謝にも似て、肉体の一部が生理的に死に、それによつて新しい生命を解放するしくみになってをります。カタルシスとは、根本的に、さういふことを意味します。

もしかういふカタルシスがおこなはれなければわれわれの肉体はどうなるか。古き英雄は苦悶しながら、なかなか死にたえな

い。あるいは死んでしまつてゐながら、体外に排泄されない。さうなると屍は体内で腐敗しはじめ、その毒が若き王を蝕みはじめるのです。われわれの生理においてばかりでなく、情感においても——むしろそこにおいてなほさら——かういふ現象がしばしば見受けられないでせうか。

△福田恒存 芸術とは何か 傍点 筆者V

観客は孤独であつてはならない。「マクベス」を引用しつつ述べたように、俳優とともに演技しなければならぬ。

現代の観客は孤独である。たとえば、映画の観客は、暗闇の中で、目を光らせながら、自己の殻の中に堅くとじこもっている。隣の観客の肩をつつき、スクリーンに拍手をおくることをやらない。江戸時代の芝居絵を見ると観客は、車座になつて食事をしていたりする。花道を登場する役者とは、心の交流があつたであらう。映画の観客は、冷たい目を光らせているだけである。相手がメカニズムの産物ではしかたもあるまいが、演劇までそうであつてはならない。舞台と観客の交流がなければならぬ。観客は、俳優とともに演技しなければならぬ。

孤独は現代人の病氣である。カタルシスの必要なゆえんである。

現代人は、「死」を演技し、「生」を開放しなければならぬ。高校生とて同じことである。

「生」の開放は、演劇の使命である。そののできる演劇でなければならぬ。それが演劇のあるべき姿である。

さて、ここまで述べてくれば、4で述べた「演劇を人間形成の場として、広い意味の教育に利用しようとする考え方」の意味は、はっきりしてくる。

演劇による人間形成とは、演劇が「生」の開放をするがゆえに、つまり、カタルシスが行なわれるがゆえに、人間存在の根本にかかわる教育なのである。

第一義的には、学校演劇は、この教育のためにあらねばならない。5で述べたような教育的効果のためにのみあるのではない。演劇は教育の手段ではなく、教育そのものだと言えようか。クラブ活動をはみ出ていると言えよう。

7

従来の学校演劇が、この意味で活動していたかと言えば、ほとんど、そうでなかったとしか言えまい。では、そんな学校演劇は可能か。検討してみる。

まず、俳優も観客もお互いに知りあった一つの共通の場に住生活していること。現代、舞台と観客との交流のない原因の一つは、日本人に共通の場のないということである。この点、学校演劇は、すでに共通の場を持っているのである。隣の観客も友人なら、舞台上にいる俳優も友人なのである。

孤独という病気におかされつつある高校生の観客に欠陥がある。

まじめな高校生たちは、まるで授業でも受けるような態度で舞台を見つめる。そして、彼等なりの人生観を演劇の中に見出す。しかし、演劇は、哲学でもなければ、倫理でもない。「生」を開放するあそびなのである。人間の本能に基づくあそびなのである。個性という亡霊にとりつかれて、必死に自己を主張する場ではない。自己を開放する場である。

自己の知識をふやそうとして演劇を見る高校生もいる。社会は彼等のためにダイジェスト文化を提供しつづけている。小説を読むより、その映画化で間に合うのである。この受身の姿勢は、機械文明のおかげか。しかし、それでは、演劇を見ることはできない。演劇は、知識を与える教室ではない。

まるで、映画やテレビを見るように娯楽として舞台を見る高校生もいる。彼等はたえず、映画やテレビを念頭におき、比較しながら見ている。そして、おもしろくなければ、まるでテレビのチャンネルを切りかえるように、頭の中で、興味の焦点をさっさと他へ移してしまう。映画やテレビと演劇とが質を異にする点は、観客のあり方にある。演劇の観客は自ら演技して、舞台をつくっていかねばならない。

よい舞台を見せること。そのためにはよい戯曲が必要である。よい指導者が必要である。

たとえば、高校野球の選手と応援団とか、体育大会の参加者とか、高校時代には、心の奥底からゆさぶる行事がある。それらにおいて、たしかに、カタルシスが行なわれていると見てよいのである。「生」の開放が行なわれていると見てよいのである。演劇においてもけっして夢ではない。

(兵庫県甲南女子高等学校教諭)